全例を描画法から分類すると，^{203}Hg-MHP 赤血球処理法が 330 例と最も多く，その他 ^{113m}In-コロイド法 21 例，^{131}I- または ^{99m}Tc-MIAA 法 11 例，^{51}Cr- 赤血球熱処理法 9 例，^{99m}Tc- スズコロイド法 8 例であった．MHP 法は Korst らの術式に準じて行い，本法を小児 15 例にも用いた理由は本法が脾を常に最もよく描画でき，また続いて腎を描画する臨床的有用性に因る．次に，臨床診断または組織診断の確定している小児と奇形を除く MHP 法施行患者 292 例について，脾の形，大きさ，内部構造など形態的所見並びに肝影の出現程度から推定した老癈赤血球処理能としての脾機能を疾患別に比較検討した．正側面から見た形は正常者 (40 例) にても比較的多様であった．左側面での長径は，正常者 9.7±1.4 cm であったのに比べ，うっ血性脾腫 (91 例) 特にバンチ氏症候群 (12 例) が 17.6±3.3 cm と最も大きく，次に白血病 (26 例) の 15.8±5.5 cm であった．内部構造として，悪性リンパ腫 (11 例) の約半数で単発または多発の欠損像を認めたが，所謂 patchy defect は，RI 投与量が少ないためか，白血病以外特にうっ血性脾腫の一部にも軽度に認められた．脾機能は，バンチ氏症候群，肝硬変症 (64 例) などうっ血性脾腫だけでなく，球状赤血球症 (4 例)，血小板減少性紫斑病 (12 例) でも高く，また慢性肝炎 (43 例) あるいはその他ある種の疾患でもしばしば非常に高い例を認めた．

31. 肝スキャン上における脾腫像の診断的意義について

角原　紀義
（岩手医大・放）
油野　民雄　　分校　久志
利波　紀久　　久田　欣一
（金大・核医学）

肝スキャン約 1300 例 (昨年度) 中，splenomegaly (後面像で長径 13 cm 以上) を来たした，44 例中 confirm した 30 例について疾患別の検討を加えた．方法は ^{99m}Tc- スズコロイド 4 mCi, 静注後前面，後面，側面，と 3 方向を取った．結果として肝硬変 17 例 CML 5 例，meta 5 例その他 3 例であった．又 CML は 20 cm 以上がほとんど肝硬変は 20 cm を越えない傾向にあると思われる．又肝腫大を合併したものでは CML が全例肝硬変では 2 例だけであった，splenomegaly を来たした肝硬変では典型的な pattern (右葉が atrophy で左葉の swelling) で悪化像の肝硬変であると考えられる．又，Liver と Spleen の activity の相関関係も調べて見ると肝硬変の 60% が Liver＜Speleen となっている．以上 Splenomegaly を来たし Liver との，activity や hepatomegaly (肝の大きさ) の 3 者を総合的に判定すれば肝硬変，慢性骨髄性白血病の診断は容易で有用な指標だと考える．

32. 膵シンチ所見 (5)，部分欠損像

桜井　邦輝　　木戸長一郎
松尾　　孝　　三原　　修
有吉　　寛
（愛知県がんセンター放診）

膵シンチグラム上，膵の一部に欠損が見られ，診断が確実な症例 35 例について調査した．部分欠損像を呈した 35 例中 24 例 (69%) は癌症例であった．

頭部全体の欠損は 2 例に見られ，1 例は，乳頭部癌，他は頭部膿瘍であった．乳頭部附近の欠損は 3 例に見られ，3 例とも乳頭部癌であった．頭部下半の欠損は 2 例に見られ，2 例共鈎部癌であった．体部欠損は 1 例に見られ，主膵管が断裂されていない体部癌であった．体尾部の欠損は 21 例に見られ 15 例が膵癌，6 例が膵炎であったが，膵炎の症例は，全体に描出が淡くなっているものの，頭部のみ，見える程度に描出されたものである．

尾部欠損は 8 例に見られ，尾部癌 3 例，膵炎 2 例，尾部の位置異常 2 例，膵尾切除例 1 例であっ

Presented by Medical*Online